

【オンラインイベント 2020年8月21日・代官山蔦屋】

入不二基義『現実性の問題』(筑摩書房)刊行記念

入不二基義×斎藤哲也トークイベント「『現実性の問題』を哲学する！」

視聴者による感想・コメント三例 と 入不二の応答

1.

本の繰り返しにならないように、しかしレベルを落とすことなく、未読者も既読者も楽しめるよう工夫されていて、視聴してよかったと思わせる内容でした。個人的に印象に残った（勉強になった）のは以下の二点です。

- ・入不二先生の現実論は、永井先生の独在論から〈私〉を消去することを目指したものである。
 - ・『相対主義の極北』における「外部なき私たち」と『現実性の問題』における「神」は異なる。後者を「回す現実」とするならば、前者は「回る現実」である。
- あっという間の2時間でした。ありがとうございました。

【入不二の応答】

感想をどうもありがとうございます。正確に言い直しておきますと、〈私〉から〈φ〉への消去なので、（〈私〉の消去ではなく）私【一人称性】の部分のみを消すこととなります。要するに、〈 〉のみが残る。

2.

以下のような感想を持ちました。

- ・本の内容の解説は授業の方が詳しかったので、先生の著作（問題意識）の歴史を辿れたことが私的には収穫でした。『相対主義の極北』や『あるようにあり、なるようになる』との比較によって、人間の問題から「外れる」、運命の問題における中間性を「振り切

る」という、現実性を取り扱う際の（他の問題領域からの）「外れ」・「振り切り」が浮かび上がったように思います。

・いきなり何だという感想ですが、「新实在論との関連はどうですか」とか「伝統的な問題の枠組み内部で論を展開するとどうなりますか」（こんな質問は出なかったと思うけど）とかいう質問への先生のリアクションを見るのが好き。既存の型の方へと先生の考えを引っ張っていくような（カテゴライズするような）質問に対する、そういうのは好きじゃないんだけどねっていうあの態度です。

上記のような質問しがちな人と（その手の人とは隔たりのある）先生のような人との間に生じる程よい摩擦（口論になるとかではなく湿気たマッチ箱擦るくらいの摩擦）を見ると愉快？な気分になる。

・仏教からの逃れられなさについて、論理のつくりを挙げていましたが、ほんとうにそうですね（そして不思議ですね）。

斎藤さんはいくつかの仏教思想（家）を挙げて先生の哲学と仏教との繋がりを示しましたが、それらは（維摩経はともかく少なくともナーガールジュナや前後裁断に関して）は、むしろ先生が仏教を過度に意識してはいないことの現れに思える。（避けようとしてるとは言いながらも）必要であればことさら退けることなく使う、っていう。

・ 質問にあった「時間」と「現実」のこと。

水準は同じ（似ている）が相性は悪い、というのは大事な話だと思いました。

【入不二の応答】

的を射た感想・コメントをどうもありがとうございます。全般にわたって、聴くべきところをちゃんと捉えてもらえていて、安心しました。「程よい摩擦（口論になるとかではなく湿気たマッチ箱擦るくらいの摩擦）」の比喻の使い方は、秀逸ですね。最後の「大事な点」である「相性の悪さ」は、言及すればよかったのだけれど、第4章の終わりに出てくる（私なりに解釈した）「パルメニデス的世界像とヘラクレイトス的世界像の対立」に

相当します。「現実」も「時間」も、その内に矛盾を内包しているだけでなく、さらに両者どうしが強烈に矛盾し合っている、というのが私の基本の世界像ということになります。

3.

【感想】

- ・「読み方の順番について」など、理解の助けとなることの示唆は、とても良いと思います（私も、「おわりに」を先に読み、そのあとで第二章を読み始め、現在その途中です）。
- ・個人的には、核心的な諸論点に関して語ることに、もっと重点を置いて欲しかったという印象です。（講義や授業とは違って、そのような場ではなかったのかもしれませんが。）
- ・特に（気づいた限りでは）①永井独在論との違い②現実性の無内包性と事象内容の関係 ③時間との折り合いの悪さ、などは、よりつつこんだ話が聞きたかった、疑問のある論点です（以下）。

【疑問点】

- ① 本書における「(純粹)現実性」は、永井独在論の〈私〉のみならず、他者の≪私≫にも行き渡っているということになり、両者の差は（永井独在論では、山かっこのあるなしにあるのに反し）、純粹現実性の在・不在にあるのではないことになる。

その場合、違いは、その現れ方や受肉する対象の在り方にあることになるか。しかし、対象の在り方が異なるというのであれば、現実性とは別にそもそも異なっていたということになる。内容は一切同じであるのに、どう違っていったのか。

一応、その違いを有するものに受肉するとして、それにより、片方は現に実際の私であり、片方は現に可能的私である、という形で現れることになるのか？

いずれにしても、「この」決定的な違いの本質が、（純粹現実性の）単なる現れ方や、もともとの対象の何らかの違いに尽きるものなのか。

② 現実性それ自体は全くの無内包で、透明に事象や身体・モノの外側から透明に作用することにより、当の事象やモノ・身体が現実となるというのであれば、現実性が付与されない（される前の）状態の事象やモノ・身体があることになる（現実性は遍在するから、すでにすべてに付与されているといえるかもしれないが、論理的区別として、そのように考え得るのではないか）。

しかし、それは、“現に”あるのではないもの（内容だけのもの?）、ということになる。そのようなものの在り方とは一体何か？

③ 「現実性」と「時間」との「折り合いの悪さ」について。

両者が整合しないということから、どちらかの実在が脅かされる（誤りである）、という可能性は導かれるか？

【入不二の応答】

詳細なコメントをありがとうございます。

以下、三点について。

① 第2章に出てくるとおもいますが、「現に」の力は、完全に純化されると完璧に透明に働くことによって、命題内容（がただあるだけ）と区別がつかなくなります（つかなくならざるを得ない）。それと同様のことが、①についても言えます。対象の違いとしても、現れ方の違いとしても、およそ一切の違いとしては現れ出ることがないことこそが、すなわち、そういう仕方で認識の網に引っかかりようがないことこそが、現実性の力が純粹に働いていることに他ならないこととなります。ここでも、「無い」ことが最も強く「ある」ことと、一致します。

② 「現に」という力の働きについて気づいていく段階（認識論的水準の突出）においては、力が働く「前」と「後」を（これ性を持たない単なる対象とこれ性の付与された対象

というように) 区別できて、その力はずねにすでに「外」からやって来るように理解されなければならないわけですが、しかしその気づきの終局段階(存在論的水準の突出)においては、①で述べたように、これ性(現実性の力の働き)はすべてに浸透して循環する力なので、遍在するよりも「前」など論理的にさえ問題にできない程に遍在するということになります。この「前」の無さについては、第6章でも関連する議論が出てきます。

③ 現実性と時間の「折り合いの悪さ」つまり矛盾関係は、その「相容れなさ」こそが世界を構成しているような「構成的な矛盾」であると考えています。その「折り合いの悪さ」は、イベントでも言及すればよかったですのですが、第4章の終わりに出てくる(私なりに解釈した)「パルメニデス的世界像とヘラクレイトス的世界像の対立」に相当します。

「現実」も「時間」も、その内に矛盾を内包しているだけでなく、さらに両者どうしが強烈に矛盾し合っている、というのが私の基本の世界像ということになります。